



誰一人取り残されない学級集団・学習集団づくり

小中一貫教育において、第4号で紹介したように大きく分けて6つの事に取り組みます。今回は第5弾として、二宮町の小・中学校が共通性と一貫性を持って、継続的に「誰一人取り残されない学級集団・学習集団づくり」を推進していることについて具体的に紹介します。

集団は「学習や生活の基盤」になる最も重要なもの

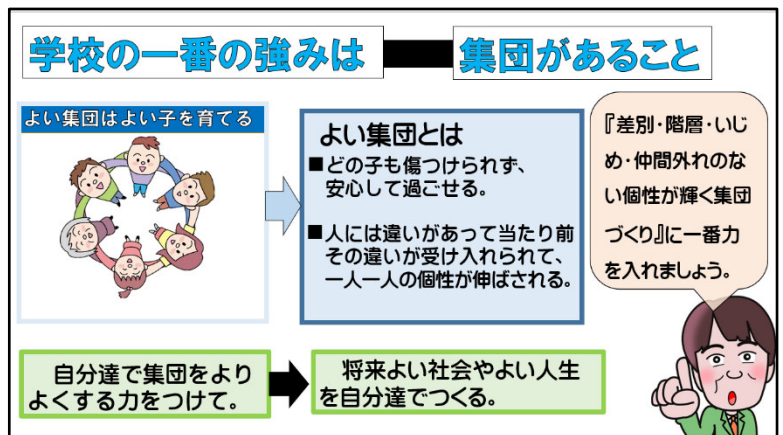
人の成長は、集団に大きく左右されます。良い集団の中では、良い成長が期待できます。集団生活が基本である学校では、良い集団をつくって、一人一人のより良い成長をめざすことができます。

良い集団とは、どんな集団でしょうか。人には、「個性、興味関心、発達、見方考え方、価値観、意欲、性格」など、たくさんの違いがあります。その違いが差別なく受け入れられて、どの子も「居場所」がある、安心して過ごせる集団のことです。そのような集団の中で生活できれば、それぞれの子に応じた資質・能力が確実に伸ばされます。

学校の一番の強みは集団であること

一人一人の違いが原因で、集団の生活では、自然に過ごしていてもトラブルが起きます。そのトラブルを、そのままにせず、原因や解決方法について、「多様な考えや本音が出される話し合い」をすることで、「解決手段」や「学級の規範」を作ることができます。この積み重ねによって、よい集団をつくり、より良い生活をするための態度と能力が培われます。

そして、将来一人一人が、自分の生活や地域、社会をより良くするための努力や働きかけができるようになって、豊かな生活ができるのです。このような体験や学びができるのは、集団がある「学校の強み」です。



「主体的・対話的で深い学び」と集団の関係

二宮町の小中一貫教育では第6号(令和4年9月1日発行)で紹介したとおり、各教科・領域で資質・能力を育成する「主体的・対話的で深い学び」を推進しています。

「主体的・対話的で深い学び」は、教師の話し合いの技術や工夫だけでは実現できません。

「主体的・対話的で深い学び」は、児童生徒の個別の経験や考え、価値観などが幅広く発言されることで成立します。思ったことが気軽に発言できて、まちがいをばかにしない、一人一人の個性や違いが受け入れられる「受容的な集団」において実現するものです。

したがって、「主体的・対話的で深い学び」の実践は、話し合いや授業の進め方の工夫に力を入れるとともに、「よい学級集団づくり」に力を入れることがなによりも大切になります。

